東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（九）

―大名・藩主とその家の蔵書印―

中善寺　慎

既刊連載目次

一　朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印　書報35号
二　僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上）　書報36号
三　僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下）　書報37号
四　国学者の蔵書印（上）　書報38号
五　国学者の蔵書印（下）　書報39号
六　漢学者・漢詩人の蔵書印　書報40号
七　学校・教育機関の蔵書印　書報41号
八　医家・本草家の蔵書印　書報42号

凡　例

・印影は縮尺任意の単色写真である。
・印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。
・複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に＊印を付した。
・資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。
・蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。

市古貞次［ほか］編『国書人名辞典』
藩主人名事典編纂委員会編『三百藩藩主人名事典』
井上宗雄［ほか］編『日本古典籍書誌学辞典』
国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』
国立国会図書館編『人と蔵書と蔵書印』

・配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。

秋月種樹（一八三三―一九〇四）

幕末期の日向国高鍋藩世子。天保四年（一八三三）秋月種任の三男として、江戸上麻布百姓町の藩邸に生まれる。母は早川氏。兄種殷の順養子。初め政太郎、のち右京亮と称す。古香のほか、三十六湾外史・雲烟外史・松渓・縮堂・楽山・氷壺・千歳亭居士・千歳叟などと号した。少年時代に塩谷宕陰に学び秀才の誉れ高く小笠原明山・本多静山と合わせて天下の三公子と称せられた。文久二年（一八六二）学問所奉行となり、翌三年若年寄格を兼ね、将軍家茂の侍読となった。維新後に明治政府に出仕し参与、ついで明治天皇の侍読となった。公議所の議長や大学大監・左院少議官などを歴任、のち元老院議官・貴族院議員となった。晩年は片瀬に住み、明治三十七年（一九〇四）病のため没す。高鍋大龍寺に葬る。漢詩を能くし書画の名手であり、文人華族として名を馳せた。著書に『古香公詩鈔』、『詩史』などがある。

「楽山珍玩」（63）　『大学章句序』（I―八―A―八〇一）

池田光政（一六〇九―一六八二）

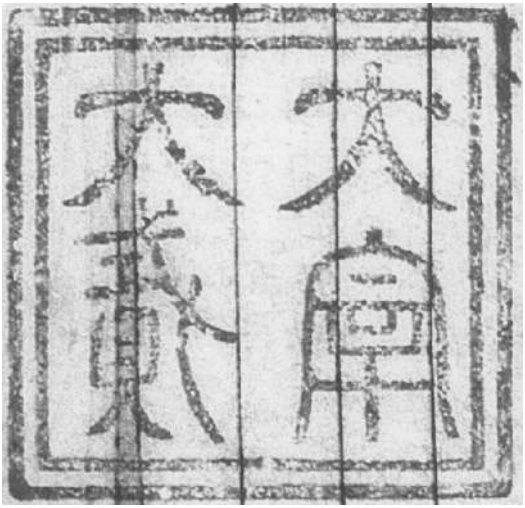
江戸時代初期の外様大名。備前国岡山藩主。慶長十四年（一六〇九）池田利隆の長男に生まれる。母は榊原康政の女。名は初め幸隆、のち光政。通称は新太郎。諱は芳烈公。従四位下。侍従。左少将。松平氏とも。元和二年（一六一六）父の遺領播磨姫路藩を継ぐが、翌年因幡・伯耆両国に減封、さらに寛永九年（一六三二）備前岡山に転封となる。岡山藩政の確立を主導。好学の名君といわれ、中江藤樹・熊沢蕃山らに儒学を学ぶ。農政に心を用い新田開発にも尽力した。花畠教場（花園学舎）や閑谷学校を設ける。経術に長じ和歌を能くし茶事を嗜んだ。天和二年（一六八二）岡山城内に没し、備前和気郡和意谷の墓地に儒法で埋葬される。現在、家蔵文書の多くは岡山大学付属図書館池田家文庫に所蔵される。

「池田新太郎」（32）　　『論語集解』（一―C―三七）

植村家長（一七五四―一八二八）

江戸時代後期の譜代大名。大和国高取藩主。宝暦四年（一七五四）植村家道の次男として高取に生まれる。名は家長。通称は熊五郎・熊之助・兵部・兵部少輔。号は廷君。出羽守、のち駿河守。従五位下。兄家利に嫡子なく、その養嗣となり、天明五年（一七八五）家督を継ぐ。寛永五年（一七九三）奏者番となる。将軍家斉の信任篤く、寺社奉行・若年寄を経て、文政八年（一八二五）老中格となった。漢詩を能くし、また飛鳥井家に蹴鞠を学ぶ。文政十一年（一八二八）没。墓は江戸芝如来寺。

「高取植村文庫」（43）　　『飛鴻堂印譜』（XI―六―C―二）

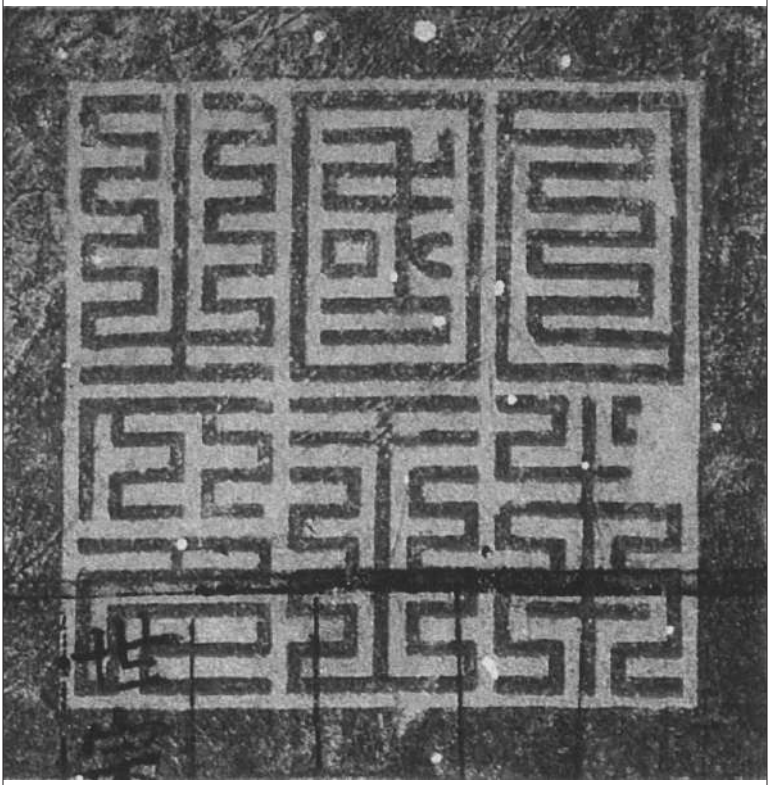


大内義隆（一五〇七―一五五一）

戦国時代の武将。永正四年（一五〇七）大内義興の長男に生まれる。本姓は多々良。名は義隆。幼名は亀童丸。周防介、左京大夫、大宰大弐、伊予介、治部・兵部卿など歴任、天文十七年（一五四八）従二位まで昇る。享禄元年（一五二八）家督を継ぎ、周防・長門・豊前・筑前・石見・安芸の守護を兼ねる。儒学・仏教学・神道学・有識故実・和歌・連歌・管弦など多方面に関心を持ち、治世の後半は軍事よりも文化的事業に力を注いだ。治安の乱れた京より多くの公家を招き、清原宣賢・三条西実隆ら各分野の人々と交流があった。天文二十年（一五五一）重臣の陶晴賢の謀反に遭い、逃亡中の長門深川大寧寺で自刃、同寺に葬られる。大内家歴代の蒐集した珍籍稀書は、そのほとんどが失われた。大内版を刊行、『聚分韻略』（二―C―c―三）は巻末跋文に義隆の名を残す。

「日本国王之印」木印と「大宰大弐」銅印は毛利家に襲蔵され、毛利博物館に現存する。

「日本国王之印」（101）　『唐駱賓王詩集』（XI―四―A―二）
＊『続三綱行実図』（XI―四―B―三）
『緇林宝訓』（二―B―b―九〇）
「大宰大弐」（64）　『唐駱賓王詩集』（XI―四―A―二）
＊『続三綱行実図』（XI―四―B―三）
『緇林宝訓』（二―B―b―九〇）



鹿児島藩島津家

薩摩国鹿児島に藩庁を置く外様大名。鎌倉時代より薩摩・大隅・日向三国の守護の系譜をひき、明治維新を迎えるまで存続した雄藩の一つ。明治四年（一八七一）の廃藩置県により、薩摩・大隅は鹿児島県となった。明治十七年（一八八四）華族令により、島津家は公爵となる。西南戦争での焼失を免れた島津家の主要文書は、のち明治二十三年（一八九〇）頃に東京袖ヶ崎の島津邸へ移送される。袖ヶ崎は、もと仙台藩伊達家の下屋敷で、明治初年に島津家の所有となり、大正四年（一九一五年）ジョサイア・コンドル設計の英国風洋館が竣工（清泉女子大学本館として現存）。袖ヶ崎邸の島津家文書は、昭和三十二年（一九五七）前後に東京大学史料編纂所の購入するところとなった。ほかに、玉里島津家所蔵資料約四千余点が鹿児島大学附属図書館玉里文庫に収蔵される。

「東京薩邸蔵書」（78）『万葉集略解』（Ⅶ-二-K-b-一〇二）

久留米藩有馬家

筑後国御井郡久留米に藩庁を置く外様大名。元和六年（一六二〇）以降、藩主は有馬家。歴代藩主には文教に意を注いだ者も多い。明治四年（一八七一）廃藩置県によって久留米県となり、のち三潴県を経て福岡県に編入された。明治十七年（一八八四）有馬家は伯爵となる。東京の有馬家修史所（明治四十五年創設。のち家史編纂所と改称。昭和四年九月廃止）で収集した藩政史料や家臣史料が昭和二十五年（一九五〇）以降に「有馬家文書」として久留米市立図書館に寄贈・保存されている。

「納戸蔵本」（40）　＊『二十一史』（Ⅱ－一－一）

『熙朝奏議』（Ⅺ－三－A－b－一四九）

桑名藩松平家

伊勢国桑名郡桑名に藩庁を置く譜代大名。徳川家康の異父弟松平定勝を祖とする。宝永七年（一七一〇）越後高田に国替えとなり、寛保元年（一七四一）陸奥白河への転封を経て、文政六年（一八二三）桑名に復封した。以後明治維新まで、定永・定和・定猷・定敬・定教の五代を重ねる。好学の藩主を輩出し、白河に設立の藩校立教館を桑名に移し、藩士の教育にあたらせている。明治四年（一八七一）廃藩置県により桑名藩は廃され、桑名県、安濃津県を経て三重県に編入。明治十七年（一八八四）松平家は子爵となる。明治初年以降に資料は散逸しており、内閣文庫と国立国会図書館に所蔵がある。

蔵書印「桑名」「桑名文庫」は白河時代の意匠を踏襲している。

「桑名」（36）　＊『江談抄』（Ⅱ－一－E－一〇八二）
『正徳桑韓唱和集紀事及事実』（Ⅻ－三－A－五八）
「桑名文庫」（64）　『江談抄』（Ⅱ－一－E－一〇八二）
＊『求言録』（Ⅵ－六－三八）
『論語集解』（一－C－四一）

高力隆長（一五九九―一六七六）

江戸時代初期の大名。高力忠房の嫡子として慶長四年（一五九九）に生まれる。初名は守長。隆長・高長と名乗り、通称は左近大夫。元和九年（一六二三）従五位下に叙任。明暦二年（一六五六）父の遺領を継ぎ肥前国島原藩主となる。圧政と驕慢があったとされ、寛文八年（一六六八）所領を没収され陸奥国に流罪となり、蟄居のまま延宝四年（一六七六）に没す。刀剣を愛好し蔵書家として知られ、林羅山との交友もあった。刀匠古備前高平の名を姓に模した蔵書印は、所持する名刀を誇ってのことかと思われる。

「喜山」（23）　『羅念庵集』（Ⅳ―二―E―四）

「高平隆長」（34）　『羅念庵集』（Ⅳ―二―E―四）

小諸藩牧野家

信濃国佐久郡小諸に藩庁を置く譜代大名。牧野康重入封の元禄十五年（一七〇二）以降明治維新まで藩主十代を重ねる。文化二年（一八〇五）に藩校明倫堂を創設、藩士の教育にあたらせた。明治四年（一八七一）廃藩置県により小諸県となり、長野県に編入。牧野家は子爵とされた。掲出書は「白雲書庫本」と称される万葉集で、江戸時代初期の筆写と推測されているものである。

「小諸蔵書」（29）　　『万葉集』（五−C−四）

白河藩松平家

陸奥国白河郡白河に藩庁を置く譜代大名。寛保元年（一七四一）越後国高田から入封して以来、文政六年（一八二三）に桑名に転封となるまでの八十三年間、定賢・定邦・定信・定永と四代の藩主が立った。寛政三年（一七九一）定信が藩校立教館を創設。国立国会図書館所蔵の『白河文庫全書分類目録』は文政三年時点の蔵書を分類記録したもの。「白河文庫」印を捺す『求言録』と『論語集解』が著録されている。

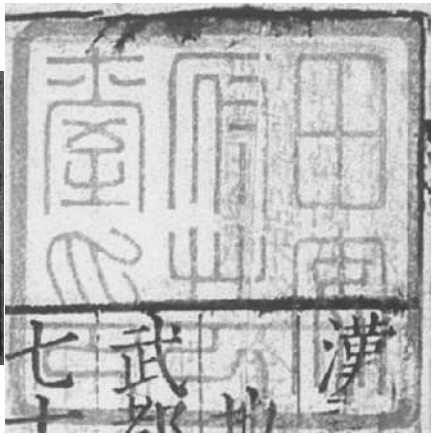
「白河」「白河文庫」「桑名」「桑名文庫」「楽亭文庫」「立教館図書印」の諸印は単独で捺されることなく常に併用されており、資料の所属が不明瞭である。ただ、国立国会図書館所蔵本をも含めて観察すると、明らかに「白河」印と「白河文庫」印とは使い分けている様子が見られる。また、「白河」「桑名」「楽亭文庫」印に強い継承関係を、「白河文庫」「桑名文庫」「立教館図書印」印にやや強い継承関係を認めることができそうである。

「白河」（31）　＊『江談抄』（Ⅱ－一－E－一〇八二）
『正徳桑韓唱和集紀事及事実』（Ⅻ－三－A－五八）
「白河文庫」（64）　＊『求言録』（Ⅵ－六－三八）
『論語集解』（一－C－四一）

仙石政固（一八四三―一九一七）

幕末期の外様大名。天保十四年（一八四三）土岐政賢の長男に生まれる。名は政固。幼名は鋭雄。字は蔵卿。号は矯堂・馨山。従五位下。越前守。慶応元年（一八六五）但馬国出石藩主仙石久利の養嗣子となる。維新の際には藩主に代わって上京し国事に奔走した。明治二年（一八六九）学校権判事。明治三年（一八七〇）家督を相続。出石藩知事を経て貴族院議員。子爵。大正六年（一九一七）没。墓は東京白山大乗寺。歌を海上胤平に学び和歌を能くし、家集『馨山詠草』がある。晩翠楼は仙石家の堂号。書籍館に献納された旧蔵書は、現在は内閣文庫の蔵書となっている。

「晩翠楼図書記」（27）　『日本小史』（XI―五―A―一〇〇九）



田安徳川家

徳川御三卿のひとつ。八代将軍徳川吉宗の次男宗武を祖とする。享保十六年（一七三一）江戸城田安御門内に屋敷を与えられたところから田安家を称した。田安宗武（一七一五―一七七一）は父の感化により学問を好み、有職故実をはじめとする和学に傾注し、著述も多い。和漢書数十種を譲与され蔵書構築が始まる。掲出書『漢書評林』はこの時に吉宗から譲渡されたものと思われる。宗武没後は二代治察、三代斉匡により充実が図られた。「献英楼図書記」印と「田安府芸台印」印とは、斉匡の時代に捺されたものと考えられている。明治維新後は伯爵家となるが、屋敷地の移動に伴い蔵書の流出が相次ぐ。蓬左文庫に管理を委託していた時期もある。宗武関係・家史関係の書籍は、現在、国文学研究資料館に寄託されている。

「献英楼図書記」（36）　＊『清嘉録』（Ⅱ―一二―八〇一）
『水鳥記』（三―F―a―ろ―三二）
「田安府芸台印」（53）　＊『漢書評林』（Ⅱ―一―一六八）
『清嘉録』（Ⅱ―一二―八〇一）
『水鳥記』（三―F―a―ろ―三二）
「田藩文庫」（38）　＊『漢書評林』（Ⅱ―一―一六八）
『水鳥記』（三―F―a―ろ―三二）

津山藩松平家

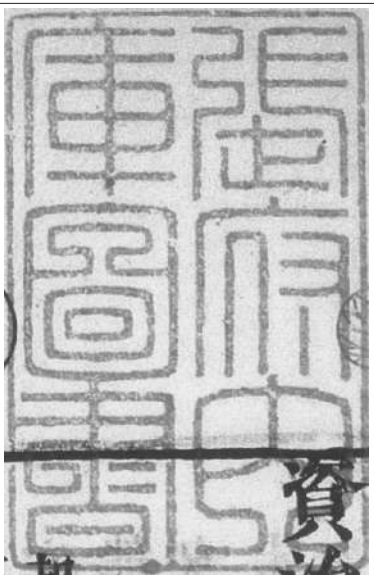
美作国苫田郡津山に藩庁を置く親藩。明和二年（一七六五）藩主松平康致が城内に学問所を設立。宇田川家・箕作家を藩医として登用し、すぐれた洋学者を輩出した。幕末期には親藩ながら朝命遵奉し、大勢に順応して明治維新を迎える。廃藩置県により津山県・北条県を経て岡山県に編入。松平家は子爵となる。戦後間もなく本草関係の写本・版本類が流出。松平家津山事務所と東京の松平邸とに保存されていた松平家の文書は、昭和三十四年（一九五九）津山市に一括寄贈され、現在は津山郷土博物館に愛山文庫として収蔵される。

「津山文庫」（32）　『名物六帖』（Ⅱ-一-D-一〇一五）

徳島藩蜂須賀家

阿波国名東郡徳島に藩庁を置いた外様大名。蜂須賀家は江戸時代に阿波淡路両国を所領とした。明治以降は侯爵家。藩の書庫阿波国文庫は、柴野栗山（一七三六―一八〇七）や屋代弘賢（一七九五―一八五九）らの蔵書が献納され、幕末には質量ともに充実していた。その一部が徳島県立師範学校、県立徳島中学校を経て県立光慶図書館に伝存したが、昭和二十年（一九四五）の空襲と昭和二十五年（一九五〇）の火災によりほぼ焼失した。他に、明治維新の際に旧臣に分与され多少の散逸があり、徳島県立図書館で再収集されたものや内閣文庫収蔵の阿波国文庫本が知られる。また、これとは別に東京と徳島の蜂須賀本邸・別邸に残存していたものがあり、昭和二十七年（一九五二）頃に売却されている。歌書・物語中心の善本が専修大学図書館に収蔵される。

「阿波国書籍」（81）　『和蘭字彙』（Ⅷ―一〇―一〇一八）
「阿波国文庫」（59）　＊『橘窓自語』（Ⅱ―一―E―一〇二七）
『職人尽歌合』（Ⅶ―二―K―d―一〇）
『坂田金平往来』（Ⅶ―二―N―二一）
「阿波国文庫（単郭）」（59）　『論語集解』（二―C―a―二）
「蜂須賀文庫」（45）　『万国公法』（Ⅻ―一―B―一〇〇一）



名古屋藩徳川家

尾張国愛知郡名古屋に藩庁を置いた親藩。徳川御三家のひとつ。徳川家康の九男徳川義直を祖とする。慶長十二年（一六〇七）甲斐国より移封。明治維新まで十六代の藩主を数える。廃藩置県により名古屋県となり、犬山県との統合等を経て愛知県になる。維新後は侯爵家。家康の駿河御譲本を含む藩の蔵書は歴代藩主によって拡充がはかられ、幕末期の蔵書数五万点と推定される屈指の大名文庫となった。明治の混乱期には払い出しなどにより蔵書の約三分の一が流出。残った蔵書は、藩庁や別邸の蔵書とともに東京と名古屋の屋敷に保管された。その後、昭和六年（一九三一）徳川黎明会が創設され、昭和十年（一九三五）東京目白の邸内に蓬左文庫を設立して一般公開された。蓬左文庫は昭和二十五年（一九五〇）に名古屋市に移管され現在に至る。

「張府内庫図書」（75）　『資治通鑑綱目』（Ⅱ-二-八〇六）

一橋徳川家

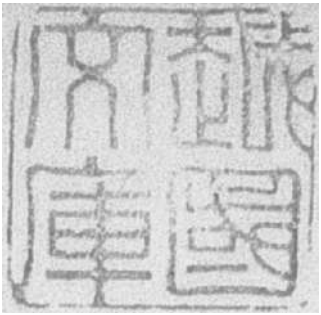
徳川御三卿のひとつ。八代将軍徳川吉宗の四男宗尹を祖とする。元文五年（一七四〇）江戸城一橋御門内に屋敷を与えられたところから一橋家を称した。一橋家からは、二代治斉の四男家斉が十一代将軍となり、徳川斉昭の七男で一橋家を継いだ慶喜が十五代将軍となった。明治維新後は、伯爵家となる。家伝の文書や蔵書類は明治維新期の混乱にも散逸せず小石川林町の徳川邸に保管されていたが、昭和十八年（一九四三）一橋学問所旧蔵書を含む家蔵書が東京国立博物館の収蔵するところとなった。残された文書類は戦後に水戸丹下の徳川邸に移され、昭和五十九年（一九八四）一橋徳川家文書として茨城県立歴史館に寄贈されている。

「一橋府図書印」（75）　　『七書』（三―A―k―一）

弘前藩津軽家

陸奥国津軽郡弘前に藩庁を置いた外様大名。藩校は、国元に稽古館、江戸に弘道館が設置された。廃藩置県により弘前県。周辺諸県を併せ、青森県となる。津軽家は明治維新後に伯爵。津軽家旧蔵書は、東奥義塾図書館本がある程度そのまとまりを残しているのみで、その他は散逸した。文書類は、弘前の津軽氏家政事務所保管史料が戦前に弘前市立図書館に移管されている。東京下落合にあった津軽邸は戦災に遭っているが、焼失を免れた史料が昭和二十三年（一九四八）文部省に移譲され、現在は国文学研究資料館が収蔵する。

「津軽蔵書」（45）　『榑桑名賢詩集』（Ⅶ－四－C－一〇六八）



福井藩松平家

越前国足羽郡福井に藩庁を置く親藩。越前松平家は徳川御三家に次ぐ名門とされた。文政二年（一八一九）には藩校正義堂が設けられるが、田安家から入った慶永（春嶽）が学問の振興を図り、安政二年（一八五五）藩校明道館を創立した。廃藩置県により福井県ついで足羽県となり、さらに敦賀県を経て石川県に併合されたのち分立、福井県となる。松平家は明治二十一年（一八八八）侯爵。松平本家伝来の蔵書は廃藩置県後に東京本邸に納められていたが、明治二十二年（一八八九）福井に移され、松平土地管理所の土蔵に保管された。ここで戦災を免れた松平家所蔵本および藩庁関係の古文書が、昭和二十五年（一九五〇）以降数次にわたり福井県立図書館に寄託され、松平文庫として収蔵されている。他に、藩校旧蔵書を中心とする国書・漢籍などは、明治四十二年（一九〇九）福井市に寄贈され、越国文庫として福井市立図書館に現蔵。古文書・記録類は、越葵文庫として福井市立郷土歴史博物館に寄託されている。

「越国文庫」（40）『楽翁公著書目録』（Ⅱ－一－A－一〇一〇）
「図書寮」（45）『楽翁公著書目録』（Ⅱ－一－A－一〇一〇）

福山藩阿部家

備後国深津郡福山に藩庁を置く譜代大名。宝永七年（一七一〇）阿部正邦が、下野宇都宮から福山に移封となり、以後十代正恒まで在封、幕末に至る。学問・芸術に造詣ある藩主を輩出した。天明六年（一七八六）正倫により弘道館が設立。文政元年（一八一八）には、江戸詰藩士のために丸山藩邸内に学問所がおかれる。正弘の治世に弘道館の改組があり、嘉永六年（一八五三）江戸藩邸内に、翌安政元年（一八五四）福山に誠之館が設立された。福山藩は、廃藩置県により福山県となり、深津県・小田県・岡山県と短期間に県名・県域の変更が繰り返され最終的には広島県へと編入される。維新後、阿部家は伯爵となり、旧蔵書の多くは明治四十三年（一九一〇）福山中学から福山義倉図書館に移管されたが、昭和二十年（一九四五）罹災した。江戸駒込丸山にあった藩中屋敷跡地には明治八年（一八七五）文京区立誠之小学校が開校している。

「阿部氏円山書庫之記」（40）『聖武記』（E-Ⅱ-三-〇〇一〇）

「福山文庫」（34）　『聖武記』（E-Ⅱ-三-〇〇一〇）

堀田正敦（一七五八―一八三二）

江戸時代後期の譜代大名。宝暦八年（一七五八）陸前仙台藩主伊達宗村の八男に生まれる。本姓は紀。名は村由・武良由・正敦。幼名は藤八郎。字は臨卿。号は水月。天明六年（一七八六）近江国堅田藩主堀田正富の養子となる。翌年遺領を継ぎ、従五位下、摂津守に叙任される。寛政元年（一七八九）大番頭。老中松平定信に重用され若年寄に進む。『寛政重修諸家譜』の編纂を総裁した。文政九年（一八二六）下野佐野へ転封。天保三年（一八三二）没。墓は江戸渋谷祥雲寺香林院。博物学者でもあり小野蘭山・岩崎灌園らを庇護し、『観文禽譜』、『観文獣譜』、『観文介譜』などの著作がある。和漢の学識に富み、歌文を能くし、屋代弘賢・林述斎・大槻玄沢ら文人学者と親交があった。東洋文庫に小野蘭山による転写本『観文介譜』（三―J―a―ろ―六四）、『観文獣譜』（三―J―a―ろ―六六）がある。

「堀田文庫」（74）　『古今名物類聚』（Ⅸ―三―一〇一六）

堀直格（一八〇六―一八八〇）

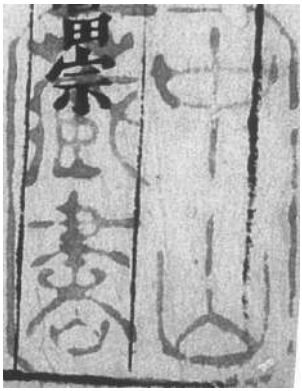
江戸時代後期の譜代大名。文化三年（一八〇六）信濃須坂藩主堀直皓の三男として江戸に生まれる。本姓は藤原。名は直格。幼名は富之進。号は誠斎・浅斎・艸花園・玉弓楼江声・九如堂・花廼家守枝・葛の屋。従五位下、内蔵頭。中務少輔。兄直興の養子となり、文政四年（一八二一）家督を継ぐ。駿河加番・大坂加番を経て大番頭、二条在番、大坂在番を歴任する。弘化二年（一八四五）致仕の後は亀戸天神近くに住み、斎号を花廼屋と称した。黒川春村に国学を学び、『扶桑名画伝』の著書がある。学問を好み文人大名として知られ、書画を能くし珍籍を蒐集した。明治十年（一八七七）奥田氏に復姓する。明治十三年（一八八〇）病のため東京に没す。墓は東京谷中墓地。国書を中心とする旧蔵書の多くが内閣文庫に蔵される。

「堀氏文庫」（31）　　『丹鶴叢書』（三―M―a―二）

増山正賢（一七五四―一八一九）

江戸時代中期の譜代大名。宝暦四年（一七五四）伊勢長島藩主増山正贇の長男として江戸に生まれる。本姓は藤原。名は正賢・選。幼名は勇之丞・千之丞。字は君選。号は雪斎・玉園・玉淵・玉瀾・灌園・蕉亭・石顛道人・巣丘山人・長洲・愚山・雪旅・松秀園・括嚢小隠など。従五位下、河内守。安永五年（一七七六）家督を継ぐ。天明五年（一七八五）藩校文礼館を創立し、藩学の振興に努めた。享和元年（一八〇一）致仕後は、江戸巣鴨の下屋敷に風流三昧の生活を送る。学を好み、詩文・書画に長じた。てがけた文芸の領域は文人が嗜みとすべき諸方面に亘り、木村蒹葭堂ら文雅の士と交わる。精緻な花鳥画を能くした。文政二年（一八一九）江戸築地に没す。墓は江戸寛永寺勧善院。「灌園逸叟」印は落款印。

「灌園逸叟」（20）　『草花写生図』（四―F―三）



松岡藩中山家

幕末期、常陸国多賀郡松岡に藩庁を置く譜代大名。中山家は、慶長十四年（一六〇九）に初代の信吉が徳川頼房に従い水戸に知行地を得て以来、代々水戸藩の付家老を務めた家柄。明治元年（一八六八）十四代中山信徴の時に他の御三家付家老とともに藩屏に列せられ、松岡藩として独立した。明治四年（一八七二）廃藩置県により松岡県、のち茨城県に編入。中山家は明治十七年（一八八四）男爵となる。

「松岡藩蔵書印」（62）　『書籍目録』（Ⅱ－一－A－一〇二四）

「中山蔵書」（50）　『書籍目録』（Ⅱ－一－A－一〇二四）

松平定信（一七五八―一八二九）

江戸時代後期の幕府老中。八代将軍徳川吉宗の孫。宝暦八年（一七五八）田安宗武の七男として生まれる。名は定信。幼名は賢丸。字は貞卿。通称はたそがれ少将・夕顔少将。号は旭峰・楽翁・花月翁・風月翁。従四位下・越中守、侍従、左近衛少将。大塚孝綽に師事して幼時より学問に励み秀才の誉れが高かった。安永三年（一七七四）奥州白河藩主松平定邦の養子となる。天明三年（一七八三）家督を継ぐ。天明七年（一七八七）老中首座となり、寛政改革を推進する。文化九年（一八一二）致仕後は、白河藩下屋敷の築地浴恩園に居を移し、花鳥風月の自然に親しむ悠々自適の生活を送った。この時期の蔵書は、天理図書館蔵『浴恩園文庫書籍目録』に窺うことができる。『江談抄』と『正徳桑韓唱和集紀事及事実』とは共に著録されている。博学多芸で詩文に長じ、書画を能くして謡曲・茶道等にも造詣が深かった。著書は多く、『宇下人言』『花月草紙』『退閑雑記』など多数にのぼる。文政十二年（一八二九）没。墓は江戸深川霊巌寺、また伊勢桑名照源寺。二万巻余あったとされる蔵書は散逸。『求言録』は定信の著書で、「源定信章」「字貞卿」の朱印が序文末に捺されている。「楽亭文庫」印の文字は松平定信の自筆であるという。

「楽亭文庫」（61）　＊『江談抄』（Ⅱ―一―E―一〇八二）
『正徳桑韓唱和集紀事及事実』（Ⅻ―三―A―五八）
「源定信章」（30）　『求言録』（Ⅵ―六―三八）
「字貞卿」（30）　『求言録』（Ⅵ―六―三八）

松平斉民（一八一四―一八九一）

幕末・維新期の大名。文化十一年（一八一四）将軍徳川家斉の十四男として江戸に生まれる。名は斉民。幼名は銀之助。字は子政。号は確堂・梅暁・大無。正三位・三河守・左近衛権少将・左近衛権中将・越後守。文化十四年（一八一七）美作国津山藩主松平斉孝の養子となり、天保二年（一八三一）家督を継ぐ。安政二年（一八五五）致仕。慶応四年（一八六八）静寛院宮の守衛を命ぜられ、将軍世子徳川家達の後見となる。風雅の趣味を持ち、文事を能くし絵画に長じた。明治二十四年（一八九一）没。墓は東京谷中墓地。

「松平確堂蔵書」（46）　『篆字彙』（Ⅰ―九―B―二二）

『広韻』（Ⅺ―三―A―a―七）

＊『名物六帖』（Ⅱ―一―D―一〇一五）ほか

松山藩松平家

伊予国温泉郡松山に藩庁を置く親藩。寛永十二年（一六三五）伊勢国桑名より移封となった松平定行を初代とする家門。以後十五代、二百三十七年余にわたり在封した。歴代藩主には好学の士が輩出。文化二年（一八〇五）藩校考徳館を創設した。廃藩置県により松山県、のち石鉄県を経て愛媛県に編入された。明治維新後、松平家は久松氏に復姓し伯爵となる。

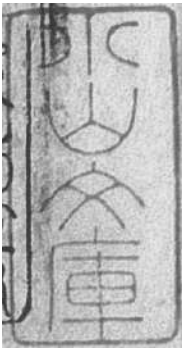
「松山革文庫」（67）　『虚堂和尚語録』（三−A−b−一〇）

松浦詮（一八四〇―一九〇八）

幕末期の外様大名。肥前国平戸藩主。天保十一年（一八四〇）松浦権之助の長男として平戸串崎の藩邸に生まれる。字は景武・義卿。大野・朝吉・峰朝吉郎と称した。号は乾宇・稽詢斎・楽水・亀岡・蓬園・風月・含雪・鶴峰・心月庵。嘉永二年（一八四九）曜の養嗣子となる。安政二年（一八五五）従五位下、肥前守に叙任され、安政五年（一八五八）家督を継ぐ。攘夷論者で藩領の海防に尽力。維新後は、少教正、宮内省御用掛、御歌会始奉行などを歴任。貴族院議員、伯爵。好古社社長。茶道を能くし、石州流家元。和漢の学に秀でるが殊に歌道は当時諸侯中随一と称される。明治三十年（一八九七）猶興館（中学）を創立している。明治四十一年（一九〇八）病により東京に没す。墓は東京都豊島区の染井墓地。浅草向柳原町には、平戸藩松浦家の旧鳥越上屋敷跡に松浦詮が造営した庭園「蓬莱園」があったが、昭和九年（一九三四）以降に売却されている。この頃、数次にわたり家蔵品の売り立てが行われた。平戸藩松浦家の旧蔵書は、昭和三十年（一九五五）に松浦史料博物館に寄贈され現在に至る。

「松浦伯爵家蔵書」（34）＊『西蔵蒙古経営私議』（四七六八）
『支那鉄道発達ニ関スル計画』（五三二五）

「伯松浦浅草向柳原町
COUNT MATSURA ASAKUSA TOKYO」（32）
『西蔵蒙古経営私議』（四七六八）



間部詮勝（一八〇二―一八八四）

幕末期の譜代大名。文化元年（一八〇四）越前鯖江藩主間部詮熙の三男に生まれる。名は初め詮良、のち詮勝。字は慈卿・慈郷。通称は鉞之進。号は松堂・晩翠軒・常足斎。文化十一年（一八一四）兄詮允の急養子となり遺領を継ぐ。文政元年（一八一八）従五位下、下総守。寺社奉行、大坂城代、京都所司代を経て、天保十一年（一八四〇）西丸老中となる。天保十四年（一八四三）辞職。安政五年（一八五八）井伊直弼により老中に登用され、日米修好通商条約の調印問題に奔走する。安政六年（一八五九）辞任。文久二年（一八六二）隠居謹慎を命ぜられる。慶応元年（一八六五）謹慎赦免、薙髪して松堂と号す。晩年は東京向島小梅村にて閑居。剣技・馬術に巧みで詩文書画を能くし、仏典にも通じた。明治十七年（一八八四）没。墓は千葉県中山法華経寺。鯖江市まなべの館に享保期以降の間部家の藩政史料が収蔵され、藩校進徳館蔵書中には間部詮勝のものと伝わる蔵書ほか藩主家寄贈の蔵書を含む。

「水山文庫」（44）　『詩人玉屑』（XI-四-B-一〇）

水野忠邦（一七九四―一八五一）

江戸時代後期の譜代大名。寛政六年（一七九四）肥前唐津藩主水野忠光の次男として江戸西ノ久保の上屋敷に生まれる。名は忠邦。通称は於菟五郎。号は松軒・蘭園・菊園。従四位下。官途は式部少輔・和泉守・左近将監・越前守・侍従。文化九年（一八一二）家督を継ぐ。文化十二年（一八一五）奏者番。文化十四年（一八一七）寺社奉行を兼任し、遠江浜松へ国替えとなる。大坂城代、京都所司代を歴任し、文政十一年（一八二八）西丸老中、天保十年（一八三九）老中首座に進む。天保改革を推進するも同十四年（一八四三）罷免。弘化元年（一八四四）老中首座に再任されるが翌年辞職する。鳥居輝蔵らの疑獄の嫌疑により隠居謹慎のまま、嘉永四年（一八五一）に没す。墓は下総結城万松寺。和歌古典を村田春門に学ぶ。公家文化を好み、蹴鞠・国学・雅楽に造詣が深い。引馬文庫を設立し、古文書・典籍等の蒐集に努めた。昭和二十七年（一九五二）水野家寄贈の藩政幕政関係資料が東京都立大学図書館に収蔵されるが、江戸青山の下屋敷の土蔵に納めていたといわれる蔵書は早くに四散したようである。

「文政辛巳浜松三畏斎文庫」（38）『韓柳文』（Ⅳ―一―八一一）

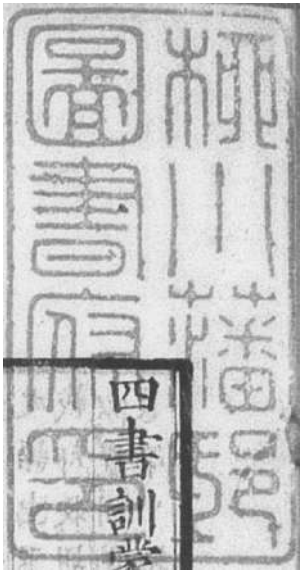
毛利高標（一七五五―一八〇一）

江戸時代中期の大名。宝暦五年（一七五五）豊後国佐伯藩主毛利高丘の男として江戸藩邸に生まれる。名は高標。幼名は彦三郎。字は培松。号は霞山・寛竜。堂号を紅粟斎と称した。従五位下、和泉守・伊勢守。宝暦十年（一七六〇）家督を継ぐ。幼時より矢野黙斎につき学問を修めた。池田冠山・市橋長昭とともに学者大名として知られる。編著に『雅衍』。安永五年（一七七六）四教堂を設立。また産業を振興して佐伯紙を世に広めた。書誌学に通じ中国より舶載の漢籍稀覯本を蒐集。天明元年（一七八一）城中三の丸に書庫を設け、集めた書籍を納め佐伯文庫と称す。享和元年（一八〇一）没。墓は江戸芝高輪東禅寺。文政十二年（一八二九）高標の孫の高翰が文庫中の善本二万余冊を幕府に献納、現在その大部分は内閣文庫と宮内庁書陵部に分蔵される。献納後に佐伯に留まったものは多くが四散し、若干が佐伯市立図書館・大分県

立図書館・国立国会図書館ほかに見ることができる。献納本には「佐伯侯毛利高標字培松蔵書画之印」が、それ以外の書籍には「佐伯文庫」印が捺されている。

国立国会図書館所蔵本でも「佐伯文庫」印に大小の相違があることを確認できる。

「佐伯文庫」（94）　＊『虞書箋』（Ⅰ－三－一〇）
『漂海録』（Ⅶ－二－四七）
『五百家注音弁昌黎先生文集』（三－A－e－一一）
「佐伯文庫」（99）　『感旧集』（Ⅳ－一－六〇）



柳川藩立花家

筑後国山門郡柳川に藩庁を置く外様大名。元和六年（一六二〇）立花宗茂が再入封し、以降十一代を経て明治維新を迎える。文政七年（一八二四）立花鑑賢の時に藩校伝習館を創設。廃藩置県により柳川県、三潴県を経て福岡県に編入。立花家は伯爵となる。藩校伝習館は、明治二年（一八六九）に文武館と改称、明治五年には廃校となる。大量の藩政史料や蔵書は立花家敷地内の対山館に保管されていたが、戦後は伝習館高等学校に受け継がれ散逸を免れる。昭和四十九年（一九七四）福岡県に保管を委託し、現在は九州歴史資料館分館柳川古文書館に伝習館文庫として収蔵される。

「柳川藩邸図書府印」（89）『四書輯疏』（I-八-A-八〇七）

米沢藩上杉家

出羽国置賜郡米沢に藩庁を置く外様大名。慶長六年（一六〇一）上杉景勝は関ヶ原の戦いの処分により会津から米沢に減封され、以後明治維新まで上杉氏がこの地を治める。安永五年（一七七六）上杉治憲の時に藩政改革が実施され、藩校興譲館が創設される。廃藩により米沢県、置賜県を経て山形県に編入となった。維新後の上杉家は伯爵。上杉家代々の蔵書の多くは散逸したが、その一部が市立米沢図書館に所蔵される。文書類は米沢市上杉博物館が収蔵する。「米沢蔵書」印は、元禄期に藩庫に収蔵された際に捺したものとされている。

市立米沢図書館に掲出書『史記桃源鈔』の僚本四冊がある。

「米沢蔵書」（60）　＊『史記桃源鈔』（一－C－一六）

『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』（五－C－六）

『吾妻鏡』（五－E－一）

和歌山藩徳川家

紀伊国名草郡和歌山に藩庁を置いた親藩。徳川御三家のひとつ。徳川家康の十男徳川頼宣を祖とする。元和五年（一六一九）入封。明治維新までに十四代の藩主を数える。廃藩置県により和歌山県になるが、紀伊国の東部と伊勢国の和歌山藩領は三重県に編入される。維新後は侯爵家となる。明治三十四年（一九〇一）徳川頼倫が東京都港区にあった旧紀州藩藩邸に南葵文庫を創設、この時の蔵書は大正十二年（一九二三）東京帝国大学附属図書館に寄贈された。南葵文庫の建物は移築されて熱海に現存する。

『群書治要』は元和二年（一六一六）刊の古活字版（駿河版）。徳川頼宜の紀州転封に伴い、駿河版活字とともに和歌山城に搬入され、この地で製本されたと推定される。明治維新後、残存していた活字は南葵文庫に保管され、昭和十五年（一九四〇）の南葵文庫解散に際しては凸版印刷に所有が移り、昭和三十七年（一九六二）駿河版銅活字として重要文化財の指定をうけた。「紀伊徳川氏蔵板記」印は蔵版印であり、かつ蔵書印の意も含んでいる。

「紀伊徳川氏蔵板記」（51）　『群書治要』（三―A―i―一）

脇坂安元（一五八四―一六五三）

江戸時代前期の外様大名。天正十二年（一五八四）中務少輔脇坂安治の次男として山城に生まれる。名は亨・安元。幼名は甚太郎。号は八雲軒。慶長五年（一六〇〇）従五位下、淡路守に任ぜられる。慶長十四年（一六〇九）父の転封に従い伊予国大洲に移り、元和元年（一六一五）兄安忠の早世により家督を継ぐ。元和三年（一六一七）信濃国飯田藩主。林羅山に儒学を学び、その高弟和田宗充を召抱えた。また和歌を飛鳥井家に学び、家集『八雲藻』がある。承応二年（一六五三）没。墓は飯田長久寺、また京都妙心寺隣華院。一万両を投じて収集されたという蔵書は八雲軒本として珍重されたが、多くは近世中期に散逸した。旧蔵書は静嘉堂文庫や竜野市立図書館に所蔵される。

朱藍二種での捺印が知られているが、掲出の四顆八印はいずれも朱印である。

「安元」（26）　＊『三体絶句鈔』（Ⅶ―四―C―一〇〇一）
『本朝無題詩』（三―F―b―二四）

「脇坂氏淡路守」（36）＊『三体絶句鈔』（Ⅶ―四―C―一〇〇一）
『本朝無題詩』（三―F―b―二四）

「藤亨」（34）　＊『三体絶句鈔』（Ⅶ―四―C―一〇〇一）
『本朝無題詩』（三―F―b―二四）

「八雲軒」（56）　＊『三体絶句鈔』（Ⅶ―四―C―一〇〇一）
『本朝無題詩』（三―F―b―二四）

（国立国会図書館司書）